

資料室だより 136

日本において教会音楽に大きく貢献した人に与えられる「辻壮一賞」のことをご存知でしょうか？ 辻先生は日本における教会音楽の先駆者です（今、グレゴリオの家で講師をされている辻康介先生はその孫にあたられます）。

「辻荘一・三浦アンナ記念学術奨励金」は、故辻荘一名誉教授（音楽史）および故三浦アンナ先生（美術史）のキリスト教芸術研究上の功績を記念し、キリスト教音楽またはキリスト教芸術領域の研究者を奨励するため、1988年に設置されました。（立教大学HPより）。

5回までは「辻壮一記念」ということで音楽に限られていましたが1993年からは美術史の三浦アンナ記念も加わり、音楽と美術の分野での貢献者への奨励金授与に発展しました。立教大学主催で厳かに礼拝とともに授与式が行われます。1988年以來この賞はそうそうたるバッハ研究者の方々が受賞してこられました。資料室では受賞された作品、受賞対象になった業績などを取書対象にしております。

今年度は喜ばしいことに**本科23期卒業生の坂本日菜さん**が受賞されました。坂本さんは作曲家として活躍しておられ、受賞作品は2016年に立教大学の「レクイエム奉唱会」で初演された「Requiem for the spirits of the victims of Pacific War」です。ちなみに私もそれを拝聴しております。

今までの受賞作品はバッハ研究、古楽関係の研究、賛美歌研究などが大部分でしたが、今回の坂本さんの受賞作は、研究書ではなく創作です。太平洋戦争犠牲者のために書かれた現代的意義をも深く併せ持つ作品です。具体的に、空襲、爆撃、原爆の様子が日本語で挿入され、既存のレクイエムのラテン語テキストと交錯していきます。さらに作曲者は具体的にペリリュー島で戦死した叔父様にこの作品を捧げておられます。無論坂本さんは叔父様とこの世で会っておられません、無念の戦死のことを伝え聞いてこられたのでしょうか。そのことが強いモチベーションになり作品に昇華されています。「これをアメリカ人のスコット・ショウ先生が指揮されたことに深い意味があると思います」と坂本さんは述べられています。

編成は混声合唱とオルガン、ハンドベル、ハープ、マリimba、トランペットです。初演でオルガンを弾かれたのも、受賞式のオルガンも本科11期卒業生の崎山裕子さんでした。

ご親族の死を悼み、平和を希求する作品が受賞作になったということは、今現在、強く平和を願わなければならないご時世にあって意義あることと思います。音楽と共に祈り、平和を作り出すために音楽の力を信じている、そのような作品です。

スコアは2階の日本人作品の棚に、坂本さんの他の作品と共に保管されます。

（杉本ゆり 記）